

新編武藏國風土記稿

比企郡

卷之百八十九

和書門			
一六五〇	二二五	二五五	冊架函號類

庫文閣内		
一六五〇	二五五	七三函
冊架函號類		

内閣文庫	
番號	和 16510
冊數	255 (186)
函號	173 210



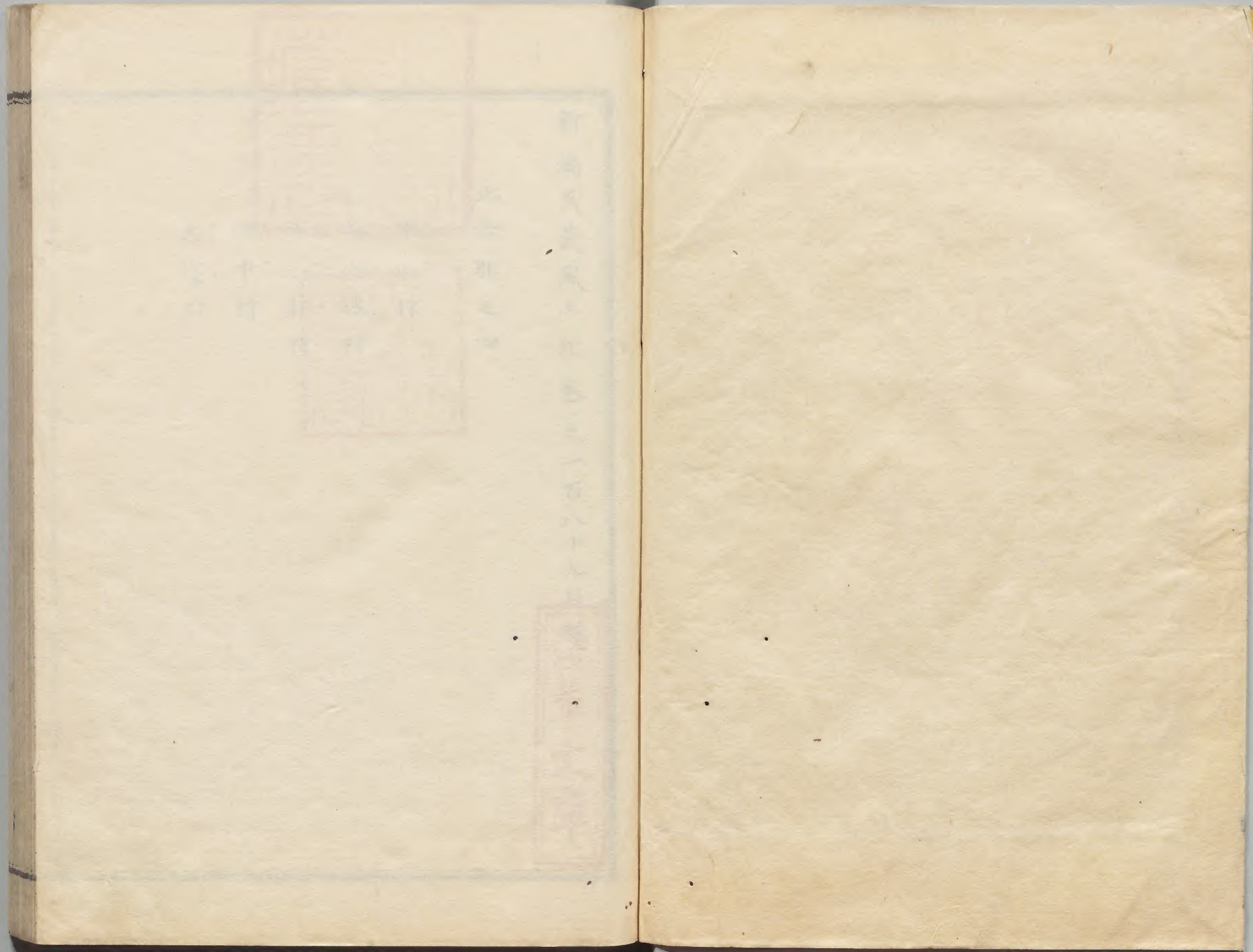
Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak





新編武藏風土記卷之一百八十九目

淺草文庫

比企郡之四



中^{ナカ} 上^{ウヘ} 下^{シモ} 畑^{ハタケ} 大塚^{オホツツ} 村^{ムラ}
山^{ヤマ} 村^{ムラ} 林^{ハヤシ} 村^{ムラ} 中^{ナカ} 村^{ムラ} 林^{ハヤシ} 村^{ムラ}

新編武藏風土記卷之一百八十九

比企郡之四

ナカヤマ
中山村

中山村ハ川嶋郷土袋庄川嶋領ニ属シ。江戸へ八十
二里ヲ隔。家數百六十。東ハ平沼村。南ハ上伊草村。西
ハ吹塚村ノ飛地アリテ。都幾川ニ至リ。川ヲ隔テ入
間郡赤尾村ニ双ヘリ。北ハ戸守南菌部ノ二村ナリ。
東西十二丁。南北十四丁。小田原役帳ニ。大草加賀守
比企郡中山七十貫文ヲ領セシヨシニユレド。土人

ハ吏ニ傳ヘズ。又下文ニ出セシ文書ニヨレハ。永禄ノ頃比企左馬助則負七。當所ヲ領セシト見ユ。御入國ノ後酒井紀伊守ニ賜ハリ。寛文元年ニ檢地セシガ。子孫兵部が時元禄十年替リテ。松平美濃守領分トナリシトキ。又檢地アリ。其後寶永二年秋元但馬守ニ賜ハリテヨリ。今ノ左衛門佐ニ至テ替ラス。高札場 村ノ西北ニアリ。

小名
上
中
南伏木
久保

越邊川^{ラッハ} 南ノ方ニアリ。當所ノ境ニテ都幾川落合ヘリ。川ニ漆テ川除堤アリ。小屋場 村ノ中ホトニアリ。明和五年領主但馬守ガ川越城ヨリ出羽國山形城ヘ移リシ時。當所川嶋領ノ内五千石ノ地ハ。モトノ如ク賜ヒシヲモテ。此所ニ小屋場ヲ作りテ。土地ノ役ニ與ルモノヲ置テ。稅務ヲ沙汰セシムト云。氷川社 八幡諏訪ノ二神ヲ合祀ス。村ノ鎮守ナリ。棟札ニ延曆三甲子年九月吉日。武列比企郡川嶋之内土袋庄中山村領主長圓ト記ス。サレト此年

號サラニ信スベカラズ。何モノカ後世カ、ル無
替ノコトヲナシ置シト見エタリ。善能寺持。

末社 稻荷社

稻荷社四宇 金剛寺持。下並同シ。

神明社四宇

諏訪社二宇

山王社 淵泉寺持

藏王社 正泉寺持

金剛寺 清月山元光院ト号ス。新義真言宗。入間郡

石井村、大智寺末。本尊釋迦ヲ安ス。開山詳ナラス。

後ニ此企丸馬助則貞中興ス。境内ニ其墓アリ。法

名元光。元和二年三月十九日卒ス。今用ル院号

ハ此法謚ニ取シ事知ベシ。則貞子孫村民ニアリ。

鐘樓 鐘ハ正保年間中興檀越則貞ノ子。次丸術

門義久建立セシガ。此鐘損セシ故。延享年中改

ノ鑄シト云。

白山社 阿彌陀堂

延命寺 三嶽山普門院ト號ス。同宗同末ナリ。本尊

彌陀ヲ安ス。

三嶽社

愛宕社

御霊社

観音堂

善能寺 守護山ト號ス。大智寺ノ門徒ナリ。下ノ三寺並ニ同ジ。本尊不動ヲ安ス。

愛宕社

薬師堂

洲泉寺 慈眼山ト號ス。大日ヲ本尊トス。

観音堂

能性寺 梅林山ト號ス。観音ヲ本尊トス。

天神社

東光寺 瑠璃山ト號ス。地藏ヲ本尊トス。

稲荷社

薬師堂

正泉寺 天台宗。下青鳥村淨光寺門徒。普門山ト号ス。

観音堂

十王堂 善能寺持

舊家者比企道作 今醫ヲ業トス。鎌倉將軍ノ頃。比企判官能負ト聞エシヨリ。其支流一旦 御當家へ仕へ奉リシガ。故アリテ除邑セラレ。永ク當所ノ民間ニ下レリト云。道作ハ其子孫ナリ。先祖能負ヨリ連綿セル系圖ヲ藏ス。其畧ニ云。比企氏ハ藤原姓ニテ。家紋ハ花菱及ヒ劍酸草ナリ。其大祖

ノ由テ出ル所ヲ記サズ。判官能貞藤四郎ト稱シ。
比企入間高麗ノ三郎ヲ領シ。故アリテ建仁三年
九月二日遠江守時政ニ誅セラル。東鑑ヲ閱ルニ。
能貞四郎トモ。藤四郎トモ稱ス。永曆ノ初頼朝配
流ノ時。能貞カ姨母比企尼。其夫掃部允ト同ク忠
節ヲ存シ。治承四年マデ廿年ノ間。比企郡ノ田地
ヲ請所トシテ。世途ヲクスケシカバ。頼朝志ヲ得
テ後其覺大方ナラズ。シカノミナラズ。能貞常ニ
昵近シテ勤勞コレ久シカリケレバ。建久元年上
洛ニ扈從シテ。右衛門尉ニ任ジ。後又判官トナル。

頼朝薨ジテ後。子頼家將軍宣下アリ。能貞ガ女若
狭局。コレニ仕ヘテ男女ノ子ヲ産メリ。サレバ能
貞外戚トシテ。權勢彌盛ナリ。建仁三年頼家病ニ
ソシシトキ。家督ノ事ニヨリ。北條時政ガ一族ヲ
除ントシテ。事頭ハレ。遂ニ誅セラレ。一族アマタ
同ク滅亡セシト云。能貞ヲ或ハ義貞トモ記ス。建
久五年ノ下ニハ。右衛門尉義貞トアリ。義ノ字ハ
能ノ字ノ誤ナルベシ。又系圖ニヨルニ。能貞ガ子
四郎時貞モ。父ト同ク自害セレカ。懐胎ノ婦人ア
リテ民間ニ隠ル。サテ平産セシニ。男子ナリケレ

ハ。岩殿觀音ノ別當養育シテ児トス。成長ノ後上
洛シテ。叔父東寺ノ僧伯耆法印圓頭ニ依テ
順徳院北面ノ侍トナル。後佐渡へ遷ラセ玉フニ
及テ。御跡ヲシタヒ奉リ。越後ニ来リ。寺泊ニ住ス。
其子小太郎負長。始ハ越後ニアリシガ。叔母若狹
局ハ頼家將軍ノ女竹之御所ノ老母タルニヨリ。
カノ御所ノ領地ヲ比企吉見ノ二郡ニ定メラル
ルニ及テ。負長其縁族タルヲ以。竊ニ越後ヨリ當
郡ニ移リ住シ。文應二年二月二日卒ス。コレヨリ
右馬允滿長。右衛門佐守長。小四郎之長。内匠助重

長。藤次補栄。藤兵衛尉久栄。
明應八年武列廣木大
佛ノ城ニテ討死。

左馬助負信。左馬助義次等。八代ヲ歴テ。世々當郡
ニ土著シ。左馬助政負ニ至ル。政負ハ上杉憲定
朝定ノ誤リカ。思フニ家藏文書ノ内ニニ仕ヘ
憲定ノ判物アル故ニ。誤記セシナルベシ。テ。シバク軍功ヲアラハシ。感状數通ヲ賜ハルト
イヘドモ。戦争ノ紛レニ失ヘリ。サレド上杉氏ノ
宿老美濃入道三樂齋ノ文書ヲ藏ス。

尚

口を遠く事 清心徳を以て
高きより好むにけり
口を遠く事 清心徳を以て

十二月廿二日 清心徳
徳

清心徳

清心徳

とて友を以て悦ぶ事也。此中より清心徳を以て
徳を以て悦ぶ事也。此中より清心徳を以て

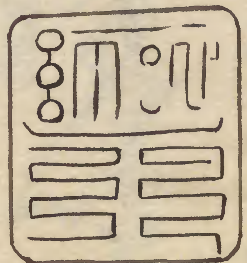
只。只。只。

三月廿五日

比。比。比。

五。五。五。

字。字。字。



揚。揚。揚。
分。分。分。
少。少。少。

如。如。如。
但。但。但。
子。子。子。
法。法。法。

善。善。善。

永祿元年辛酉

五月廿二日

書

比企左衛門尉

比企左衛門尉

比企左衛門尉

比企左衛門尉

比企左衛門尉

比企左衛門尉

比企左衛門尉

比企左衛門尉

永禄四年 辛酉

高田善徳

十二月廿一日

資正 益

比今在馬物屋 系

是等ノ文書ニヨリ。家譜ト合セ考フルニ。政負ハ
天文中上杉朝定滅亡ノ後ハ岩槻ノ城主太田三

樂ニ属セシゴトクニモユレト。上杉憲定ト云
ハ全ク上田憲定ノ文書ニ出ハ下ルヨリ牽強セ
シニヤ。政負三樂ニ仕ヘサル前ノ事實ハ傳テ失
レナルベシ。サレトモ三樂カ文書。進退ノ事資正請
取上者。不可有如在ト云ニヨレバ。恐ラクハ始扇
谷上杉ヘ仕ヘシ歟。弘治年間政負上杉ノ使節ト
シテ駿列今川義元ガ許ヘ赴キシ時。義元猿樂ヲ
催シテモテナシ。且政負ガ馬ヲ好ムヨシヲ聞テ。
ヨキ馬アマタアワメテ。政負ニ見セシメケルト
キ。

東照宮に駿府に御座ありける時にて。彼席へ出
御ありしと云。子則負てマタ父ノ名ヲ襲テ九馬
助ト稱ス。幼時ヨリ松山城主上田上野火カモト
ニ倚頼ス。コレハ資正入道永祿年中。小田原北條
氏ノ為ニ岩槻城ヲハナレシ故。則負松山へ移リ
シニヤ。天正年中常陸國筑波下ニテ真壁道無ト
合戦ノ時。及び下野國大平山ニテ皆川ト合戦ノ
時。二度マテ鎧下ノ高名アリ。ソノ後上田憲定
トヘシ所ノ書アリ。其文ニ。

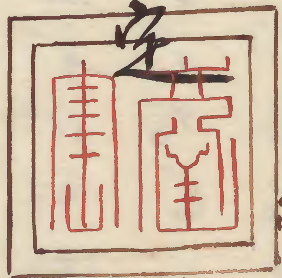
お中へ内近年お是下
少寺家分南寺家名
智交傳云玄撫山石
川鶴伝云小旗一本
純一寺一騎系記每
耀下此光也。此少寺家

并之東守之左負何
時之嚴密之替付也
及後其外は前より來
役之南守家より領
村並之申付也。從馬場
者平原守中山の如件。

永祿十五年

丁亥

九月十日 憲定



以在馬助

今按ルニ。此九馬助ハ則負ナルベシ。上田上野ハ
憲定。天正十三年ノ頃家督ヲ繼シナレバ。永祿十

五年ト云ハウケガタシ。思フニ此書モト十五年
丁亥トバカリアリシヲ。年号ノ字ヲ後人ノ書入
シナルカ。丁亥ハ天正十五年ニテ。永禄十五年ニ
アタル年ハ元龜三年壬申ナリ。松山没落ノ後。則
貞比企郡ニ塾居セシヲ。越前中納言殿聞及バレ。
慶長六年召出サントシタマヘド。當所ニ引籠テ
出ズ。子次九衛門義久召出サレテ後。同十八年
東照宮本多仇渡守ニ仰アリテ。己ニ召出カルベ
カリシガ。トカクシテ翌年ニ至ル。病ニツキテ辞
シ奉リケレバ。ヤガテ萬病圓百粒ヲ賜ヘリト云。

御恩眷ノ程知ベシ。元和二年三月十九日年五十
九ニシテ没ス。其子次九衛門義久慶長十六年駿
府へ至リシ事アリ。其頃入ノカタルヲ聞シニ。
東照宮春日下總守同九衛門松野攝津守等へ御
物語ノ次ニ。昔今川義元上杉ノ家人比企九馬助
則貞へ懇意ヲツクシ。馬ヲ揃テ見物セシメシコ
トヲオボシメシ出サレ。カノ則貞ハ関東ニ武名
アルモノニテ。ソノ父九馬助政貞モシバク軍功
アリシモノト聞シガ。今ソノ子孫ハイカバセシ
ニヤト御尋アリケレド。下總守等シラサリケレ

ハ。御答モ中上サリシトイヘバ。我久残り多キコトニ思ヒ。濱松へ行キテ目安ヲサ、ゲ、レバ。ヤカテ召出サレケル。時ニ年十九歳。後ニ大坂二度ノ御陣ニ已供奉シ。

大猷院殿ノ御時マデツカヘ奉リ。寛永十九年八月八日没ス。子藤九衛門重貞。父ニツキテ仕へ奉リ。大御番ヲツトム。其子次九衛門久貞。部屋住ヨリ大御番ヲツトメ。後ニ組頭トナリ。御加増ヲ賜ハル。子藤十郎。推久家督ノ後。天和三年ヨリ大御番ヲツトメシガ。營中ニテ夫負鳥ノ虚言ヲカク

リシコト。

常憲院殿ノ御聞ニ達シ。御糾明アリテ追放セウレケルヨリ。民間ニ下リテ。後祖先ノ舊縁ニヨリテ。常所ニ土著ス。コレヨリ次郎四郎重久。藤五郎政久。藤四郎満久。玄仙。貞吉ノ四世ヲヘテ。今ノ道作負貞ニ至ルト云。

上^{カサ}八^{ヤッ}林^{ダシ}村

上八林村ハ八林郷ニ属ス。庄名領名及江戸ノ行程
等前ニ同ジ。寛文元年檢地ノ時ヨリ上下二村ニ分
テリ。家數八十二。東ハ下八林村ニテ。南ハ平沼村。西
ハ吹塚村。北ハ一本木村ナリ。東西十丁餘。南北八丁
ニアマレリ。水早トモニ患アリ。用水ハ長樂村ヨリ
遙ニ引来ルト云。永祿ノ頃ハ太田美濃守資正カ領
セシ地ナリ。御打入ノ後ハ御料所ニテ。慶長十四
年伊奈備前守檢地ス。後酒井紀伊守カ知行所トナ

リレ頃。寛文元年再ビ檢地セリ。紀伊守ノ子孫兵部
カ時。元禄十年上リ地トナリ。松平美濃守吉保ニ賜
リ。寶永二年秋元但馬守ニ賜リテヨリ。今子孫允衛
門佐領ス。

高扎場 村ノ東ニアリ。

小名

殿ヶ谷戸

永川社 村ノ鎮守ナリ。観音寺持。

天神社 極樂寺持。

八幡社

雷電社 永禄十年太田氏資。及ビ天正十四年太田
氏房ヨリ長福寺ニ興ヘシ文書ニ。雷電宮免二丁
ト云文ニエタレバ。其頃ハ同寺ノ持ナリシト見
ユ。以上ニ社村民持。

長福寺 萬富山ト号ス。禪宗臨濟派。表村養竹院末。

開山ハ本山第二世僧奇文。元龜二年十二月十四
日寂ス。境内ニ小高伊賀守。同大炊助ガ墓アリ。大
炊助ガ名ハ。道祖土文書ニ亡ニエテ。岩槻太田氏
ニ仕ヘシ人トシユ。其法謚ヲ遠山善久居士ト云。
元和四年二月十三日没ス。伊賀守ガ法謚ヲ柏翁

禅悦居士ト云。慶長十三年八月十九日没ス。此子
孫近キ頃マデ此村ニアリテ相續セシガ。今ハ他
ヘ行シト云。常寺ニ太田氏資。同氏房ヨリ出セシ
文書アリ。其文ニ。

八林之内

一 長福寺ノ事

一 駒形支那人ノ町九

及ノ事

一 雷電文光田島

一 秋田ノ事

心

右之今亦如前

落者但打明

道檢地之有在

の件

高源

永祿十年丁卯

二月朔日

高源

軍首座侍

五

八林之内

一長福寺の事

一駒形文徳人の事

反の事

一雷電文徳人の事

武田の事

上

右の事

左の事

逐採地老有の事

仍如律

天長拾四年丙

二月廿七日氏屠

廣德院

稻荷社

地藏堂

極樂寺 法輪山ト号ス。新義真言宗。下八林村善福

寺未。阿彌陀ヲ本尊トス。

不動堂 不動ハ智證大師ノ作ナリ。

地藏院 地藏ヲ本尊トスル故ニカク號ス。下八林

村善福寺ノ門徒ナリ。

觀音寺 同門徒ナリ。コレモ觀音ヲ本尊トス。

昌圓寺 長福寺ノ末ナリ。本尊ハ不動ナリ。

駒形堂 長福寺持ナリ。彼寺ノ文書ニ。駒形宮トア

ル。是ナルベシ。馬頭觀音ヲ安ス。

十五堂 極樂寺持。
觀音堂 百姓持。

下八林村 シモヤッパヤ

下八林村ハ上八林村ノ東ニ續ケリ。家數六十六。東
ハ畑中村ニ隣リ。南ハ白井沼村。北ハ鳥羽井村ナリ。
東西七丁餘。南北十丁餘。郷庄領ノ唱。及江戸ノ行程
領主等。總テ前村ニ同ジ。
高札場 東ニアリ。

小名

馬場

天神社 村ノ鎮守ナリ。威徳寺持。

善福寺 白雲山沙門院ト號ス。新義真言宗。入間郡

今市村法恩寺末。開山詳ナラス。法流開山栄鏡。天

正九年寂スト云。本尊不動ヲ安ス。

光勝寺 本尊藥師ヲ安ス。善福寺ノ門徒ニシテ小

寺ナリ。下並ニ同。

稻荷社 阿彌陀堂

藥王寺 本尊藥師ヲ安ス。

愛宕社

威徳寺 本尊不動ヲ安ス。

藥師堂 古鰐口ヲカク。其圖九ノ如シ。



裏ニ 應永七年五月六日 本同氏也

此鰐口。元ハ高麗郡佐西熊野堂ニアリシヲ。彼

二表ニ 奉掛 藥師如來鰐口一面

堂廢セシ頃。應永七年持来テ此堂ニ掛。其時改
メテ裏面ノ銘ヲ彫リシモノナルベシ。應永七
年ハ明德四年ヲ下ルコト僅ニ八年ナレド。今
モ彼地ニ熊野堂ナケレバ。其間ニ廢セシコト
シラル。

舊家者郷助 氏ヲ道祖土ト云。道祖土ハ藤原氏ニ
テ。御堂関白道長ノ曾孫。須藤權頭負信。下野國へ
下リ那須ヲ領ス。負信六代ノ孫。那須太郎資隆ガ
子十郎資兼。始テ道祖土ト号ス。此後十三世カ間。
或ハ管領上杉氏ニ仕へ。又豆刈北條御所ニ仕フ。

十四世兵庫頭氏兼。北條早雲ニ仕へ。其孫下總守
康成。氏康ヨリ。當國北企郡老袋城ヲ賜ハル。其子
ヲ圖書助康兼ト云。康兼ガ子隼人康玄。後ニ土佐
守ト稱ス。此人始テ當村ノ内畑中ト云所ニ住シ。
岩付太田氏ノ代官ヲ勤ム。天正七年十月十五日
没ス。康玄ガ子圖書助ヨリ農家トナリ。今ノ郷助
邦彦マデ總テ九代ニ及フト云。家譜ニ載ル所カ
クノゴトシ。然レドモ當時岩付ヨリ出セシ所ノ
文書二十三通。今猶家ニ藏ス。其中ニツキテ考ル
ニ。圖書助康兼ガ頃ヨリ。岩付太田氏ニ仕ヘシコ

ト明ナリ。其餘當時ノ事實ノ考證トスベキモノ
多シ。

後之交代計

之事實を以て

おのゝりて

切之る指在る

一月書記在る

書名河内書

一冊ありて書名一冊

松本在安永

合口并并并

心 費 地 也

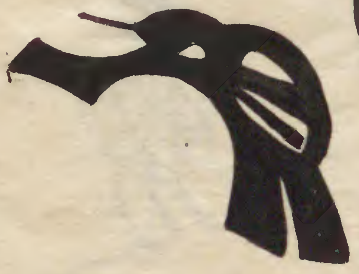
孫多孫多

徳上事 心下

事未一也月人

石姓 同 別 氏

月昔石并



乃禮去另里物及

而中田地事

曲費伍百文。辰屋及分。

冬費文。大吏在塚。

古費文。後在簿封。

曲費文。千石米檢下市の加方知。

冬費文。書祀分。

八費伍百文。大之三郎分。

月石

從之貳拾九費伍百文。

洪二事。友。一。為
同心。以。年。友。事。友。
為。強。分。新。形。以。
海。

享祿二年庚子

十月廿五日 道可

及從書畫物

三。瓦。石。心。佛。子。
佛。子。心。田。地。持。上。

安性舟人丸屋合

以七言万幸而山田

何如名之討卧山石

不始成化地好至此

抄

七月廿七日
趣

乃程出物欠

三尾公

户森

右苗字代官職事。如源忠高。而村
世相遠。と。伊。守。年。柳。新。河。成
速。一。走。廻。為。肯。授。高。儀。等。志。
但。此。儀。等。上。と。お。政。去。り。也。の
好。方。持。也。何。

永祿十年々 北條家虎朱印

丁卯
乃
海

乃。從。去。高。書。物。何。

改定。天。正。年。

其女名く八幡の御女

いふ

一本鎌倉市北區具足院

一本掛物持 日記

一騎馬上具足院甲太

面腹

と三人

右名到合國中何事

等中付月と山後

おし処柳と云ふ

於遠背志越

法多之の如

元龜三年

壬申

正月九日

北條家虎朱印

乃從高臺而取

各換付白之保告之成
申上之是と月也之御
委廻不及換付之陸地

ひきのり之旨。南に之候
申分換付之申分ハ指
差又來其申分在切之代官
百姓相渡若付之納金也

上ノ月ノ銀貨付金之ニカ

曲事ノ者大ニ如ク

天正六年 北條家虎朱印

戊子

去ノ月

乃襪古依ノ事

改定老約ノ事

一本 指物四方置立方人横置

持子具是以是金銀

紋ノ者及是等何ノ事

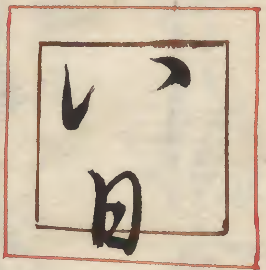
一本 燈二間 年柄金銀之弓。扣
尚下推。打子具定之。及是。
一勝 馬上具長之甲。大之物。金銀
何之。下推。子蓋。
臣三人
右前之之。是。列。之。角。少。之。扣。改

定。要。多。也。一。之。被。打。之。人。毛。以。所。和
遠。之。被。之。大。深。堅。之。作。所。名。和
以。不。之。被。之。打。之。火。是。之。用。之。
其。本。自。之。向。之。而。其。本。之。下。
少。年。

天正九年

辛巳

七月



上田憲定印

乃經七高書物

以初之書物為證

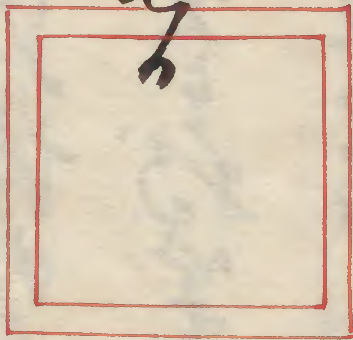
乃經七高書物

馬鑑金紋
乃經七高書物
乃經七高書物

天正九年

辛巳

七月



上田憲定印

乃經七高書物

此乃依不顯存書卷中符與之。二卷者科吏。

天正十五年
岩槻太田
氏印



丁亥

三保谷

乃程萬出助

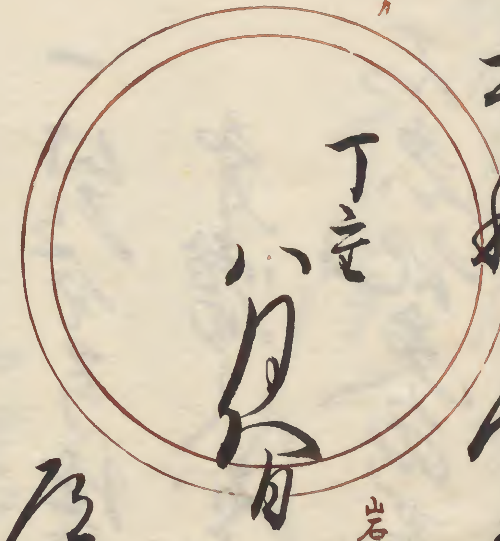
一書者乃有法者故也。用對言
百位男。十六年占辰方紀之物中
手傳之立通者撰書。人稱予也。
一時乃令弓陸陸紀何如。乃與
牙嗜之。亦立也。乃必慶濟。
右者記更。乃為。乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

天正十五年

辛卯年

丁亥

岩槻太田氏印



八月

廿五日

乃禮書及部

竹慶方由原之普信之
人忠烈之族之人是年

新し。想福修也。河
山城。及。人。方。り。志
河。方。月。月。生。教。多。人。方。
其。河。方。不。能。生。也。一。方。
名。科。之。河。方。件。

長方張上之書

天正十五年
丁亥月

庚
二月廿

岩槻太田氏印

及親書

八林

百款拾参久。事。但和田家代直

以銀兩

古積参久。

九拾七参久。

以銀兩

全二百拾七参久。

北の参久。

以銀兩

新積参久。

小字右銀兩。

古書之
乃復奉之

拾遺書之
尾陽監也

八書之
内田澤齋

三九拾遺書之

九月廿三日

所報殿

江名新

先有少頃分各報。今以紙重之。相
改。來晦日。切方。先有。付。左。攝。也。付。
越。書。之。紙。之。五。午。三。月。以。由。由。紙。

在亦之付也。乃其理之。一
俵。抄。到。其。名。其。理。之。為。之。物。
者。俵。仲。扶。也。何。

山名觀太田氏印

天正十六年カ

戊子
正月八日

石田光常助

林也
壬午

三人

右付友河高口普徳作
何何何何何何何何何何
晝夜岩付之之之之

天正十六年

如所
候。其昔儘く控取之也。
迄歎之起者料長也。

申子

三月廿日

岩槻太田氏印

乃程書也

少田

之入
乃程書也
聖旨内候

之入
乃程書也

之入
乃程書也
勝告所

秋人

石谷氏中

文人

三森古助

山本三人

右と右の右と右の右

休と休の休と休の休

中と中の中と中の中

秋人南無打志毒茶

下徳也は後七徳也

若老の徳也徳也

徳也名大守徳也徳也

若利子衆也そのを

料の料

岩槻太田氏印

天正十六年戊子

子
五月廿九日

と發行來て書信
より一令中より
人足は相違ふ所

より書信來りて
その紙面より
なり

岩槻太田氏印

天正十八年
庚寅

カ
うり
乃程書出

本烟儀別為諸軍之身度中
乃前之者門達此之致先情
矣。

一指物四。

一德金銀何之成在而之推也。
一騎自能之仕立馬謹亦之務也。

羨耀之波之諸武具委細兒
者門之轉之車。

右先情之一之隆之之程改而車
如以皮蓋之立物具是款之物矣。
忠順之役并屬之波立不籍款
見者愛之矣。何之之新之仕之出

来之日限五月廿五日之限迄也

如件

四月廿日

上田憲定印

及祖古書書物

一 本十七書畫以所深人打者祖書
十八卷割之致お伝書者一人に

中城を来百通の信原の宿中
至かり立ち得及具在の律由
と極上にて並り内地の名家
律田を割進かりん
のさき一系

一 石巻者先之由より新改申

何方凡て物の里千神也其を以て
此等事付

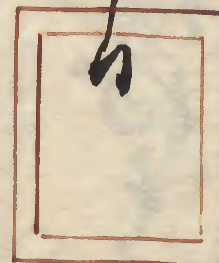
一 物中 古者亦及目也其
まの物と又子方魚りす
扇仕すりす人いふは
扱方端を念す

一 物立をりさぬか
一 百端古田海中
一 一 一

一 古色者も徳得
り世名凡て
三 白衣の持印

右方授主子法履之儀名當
方取之乃改易之也河内

古



上田定正印

及祖古書書助方

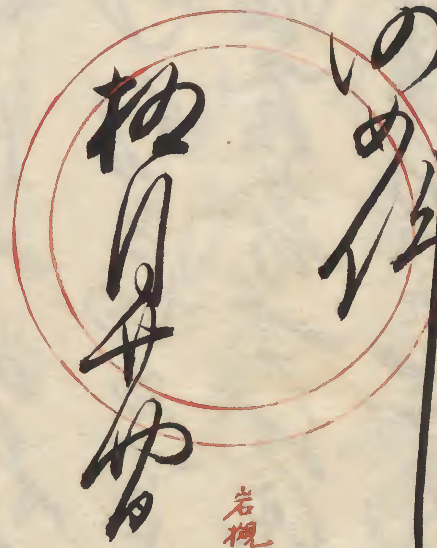
東運宅中日也

川方書女子下は墨若
心術中付方書女子瓦
連來其の切方若付大
梅角つは梅若親子來
子方若切方若上之若方七
若下若一若若若若若
若若若若若若若若若

畑中村

畑中村ニ郷庄領ノ唱ヘ。及ビ江戸ノ里敷寺前村ニ
同ジ。戸數五十八。東ハ三保谷村ニ隣リ。南ハ白井治
村ニテ。西ハ吹塚。下ハ林ノ二村ニ接シ。北ハ大塚村
ナリ。東西六丁。南北四丁。長樂用水ヲ引テ耕ス。
御打入ノ頃ヨリ酒井讚政守領セシガ。後其内ヲ割
テ紀伊守ニ分地シ。其後又何ノ頃ニヤ村内ヲ割テ
板橋源次郎ニ賜ハリシガ。元禄年間オシテ松
平美濃守吉保ガ領分トナリ。同十二年檢地セリ。寶

この件



岩槻太田氏印

及此書

永二年秋元但馬守ニ賜ハリ。今ノ左衛門佐ニ至レ
高札場 村ノ南ニアリ。

小名

曾根

雷電社 村ノ鎮守ナリ。村持。

山王社 寶曆十三年勧請ノ棟札アリ。村持。

吉祥寺 新義真言宗。下八林村善福寺門徒。山號十

ニ。本尊觀音ヲ安ス。

靈松庵 同門徒ナリ。本尊藥師ヲ安ス。

蓮月庵 真言律宗。江戸湯嶋靈雲寺末。元禄十年ノ
頃。僧松煙起立ス。

大塚^{オホツツ}村

大塚村ハ庄名領名。江戸ノ行程等前ニ同ジ。戸數四十六。東ハ三保谷村ニ隣リ。南ハ畑中村ニテ。西ハ下八林村ニ接シ。北ハ荒川ヲ限リテ。足立郡石戸宿村ニ界ヘリ。東西六丁。南北二丁。旱損ノ地ニテ。長樂用水ヲ引テ耕ス。御入國ノ後ハ御料所ニシテ。慶長十四年伊奈備前守檢地セリ。後寛永年間板橋三郎兵衛ニ賜ハリシガ。何ノ頃カ上リテ。今ハ秋元九衛門佐ガ領分ナリ。

高札場 村ノ中程ニアリ。

荒川 北ノ方郡坂ヲ流ル。川幅二十間。川ニ傍ヒテ

水除堤アリ。

諏訪社 村ノ産神ナリ。村持。下同ジ。

愛宕社

大福寺 禅宗臨濟派。表村養竹院ノ末。愛宕山ト號

ス。本尊地藏ヲ安ス。

薬師堂

新編武藏風土記卷之一百八十九終

